

アッシリア帝国東部辺境を掘る

—イラク・クルディスタン、ヤシン・テペ考古学プロジェクト：第7次調査（2023年）—

西山 伸一 中部大学人間力創成教育院教授

山田 重郎 筑波大学人文社会系教授

沼本 宏俊 国土館大学体育学部教授

サーミー・ジャミール・ハマ＝ラシード クルディスタン地域政府スレイマニヤ古物文化遺産局・職員

ニヤン・ナーセル・ハマ＝ハサン クルディスタン地域政府スレイマニヤ博物館・館長

ハーシム・ハマ＝アブドゥッラー・アブドゥッラー クルディスタン地域政府スレイマニヤ博物館・前館長

Excavating the Eastern Fringe of the Neo-Assyrian Empire: Yasin Tepe Archaeological Project (YAP), Iraqi Kurdistan, Results of the 2023 Season

NISHIYAMA, Shin'ichi Professor, School of General Education, Chubu University

YAMADA, Shigeo Professor, Faculty of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba

NUMOTO, Hiroto Professor, Faculty of Physical Education, Kokushikan University

HAMA RASHID, Sami Jamil Staff, Slemani Directorate of Antiquities and Heritage, Kurdistan Regional Government, Republic of Iraq

HAMA HASSAN, Nyan Nasr Director, Slemani Museum, Kurdistan Regional Government, Republic of Iraq

ABDULLAH, Hashim Hama Abdullah Former Director, Slemani Museum, Kurdistan Regional Government, Republic of Iraq

1. はじめに

Yasin Tepe Archaeological Project (YAP) は、2016 年以来、イラク共和国クルディスタン地域スレイマニヤ（スレイマニヤ：クルド語はスレーマニ）県南部のシャフリゾール平原に位置するヤシン・テペ遺跡とその周辺を対象として考古学調査を実施している。2023 年も、コロナ禍後、本格的なフィールド調査を実施することができた。その調査成果をここに報告する。調査期間は、2023 年 7 月 29 日から 9 月 26 日であった。

今回の調査の目的は、三つあった。まず、第一に「下の町」南東部において昨年度調査した F 地区から北と東に調査区を拡張し、都市の縁辺部の実態を解明することである。昨年度、F 地区では子供用の墓が発見されたが、2018 年の地下探査ではいくつかのアノマリーが墓地の近郊で見られる。これらがどのような構造物かを発掘により確認する。第二には、昨年度調査した G 地区から西に調査区を拡張し、建造物群がどのようにアクロポリスに向けて広がっているのかを確認することである。第三に、アクロポリスの南斜面において、昨年度開始したステップトレンチ (H 地区) を継続し、アクロポリスの編年的層位を確認する

ことである。これらの目的に沿って合計 3 カ所で発掘調査を実施した (図 1)。

また、サブ・プロジェクトとして、1) 出土人骨の調査 (2022 年、および 2023 年シーズン)、2) 遺跡とその周辺での地下探査、3) ヤシン・テペの北部および近郊の Gird-i Marif Tepe 遺跡の試掘調査、および 4) 古物文化遺産局のための文化遺産保護研修を実施した。

2. K 地区

昨年度の F 地区を拡張する目的で設定したのが、K 地区 (Operation K : 20×30 m) である。昨年度報告したように、F 地区では、子供用の墓が出土したが、その近郊では複数のアノマリーが 2018 年の地下探査で確認できていた。これらと墓地との関連を探るため、F 地区から北と東に調査区を拡張した。

これまで同様、表土直下から鉄器時代 (前 8～7 世紀) の層が現れた。調査区東部では、出土土器から判断してポスト鉄器時代 (前 6 世紀) の文化層も一部確認できた。

発掘の結果、この地区では、子供と成人の墓、道路 (街路)、水路、一般家屋、石敷き面などが確認された (図 2)。まず墓については、子供の墓が少なくとも 6 基、大人の墓が少なくとも 4 基確認できた。すべての



図1 ヤシン・テベ遺跡「下の町」南東部と調査区の位置関係(UAVによる撮影)。



図2 K地区全景(UAVによる撮影)。

墓は調査区の東部で発見された。成人の墓は、すべて土壌に伸展葬の形態をとっていた。一方、子供の墓は、従来のような甕や壺を利用した埋葬であったが、直接土壌に埋葬した事例もあった。

特筆すべきは、調査区の中央部で発見された成人の埋葬である。残念なことに上半身は、後世のかく乱により削平されていたが、腰より下の下半身部分からは豊富な副葬品が検出された。まず腰骨の上に両手で覆われた青銅製のボウルがあった。また腰骨と大腿骨の左側には、鉄製の短剣、円筒印章、スタンプ印章、鉄製品、ビーズ類などが置かれていた。人骨の分析から

中年の男性と考えられ、ある程度の社会的ステータスがあった人物と考えられる。

子供の墓は、人骨の分析から主に2～5歳程度の子供が埋葬されていた。墓の一つは、二つの甕を合わせた埋葬形態をもち、甕の一つには粘土製の山羊頭のモチーフが貼り付けてあった。この墓からは青銅製腕輪や多数のビーズ類が出土している。

昨年度の墓地は、子供の墓に限られていたが、今年度は、子供と成人の混成であり、年代もほぼ同時代と考えられる。すなわち、当初は、子供用の埋葬空間はある程度は決められていたが、その後、成人と子供の埋葬は混在していた可能性がある。

墓地以外では、この地区の北西部でドメスティックな建造物が複数件出土した。いずれも水路を伴うことから、この町では水のコントロールが重要であったことを示している。特に調査区の中央部で発見された水路は、その一方の端部に、大型の甕が埋め込まれていた。つまり、その甕から水が土壌にしみ込むような構造をもっており、当時の洗練された排水施設の一端を示している。

上記の施設は、昨年度、子供用の墓地の東部で発見された鉄器時代の大甕を解釈するヒントとなった。この大甕は、地中に垂直に埋め込まれており、今年度に周囲を半裁し、その堆積を観察した(図3)。結果としてこの甕は、青銅器時代の層に深く埋め込まれているだけでなく、甕の底が打ち欠かれて存在しない状態で



図3 昨年度K地区東部で発見され、今年度掘り出した鉄器時代の大甕(北東から)。

あった。したがって、この「底なしの甕」は何かを貯蔵するためではなく、貯めた液体が少しずつ土壌にしみ込むようになっていると考えられる。おそらくこれも排水施設の一部であった可能性が高い。甕の覆土からは、複数枚の焼成レンガや、こぶし大の石が発見されたものの、特に目立った遺物はなかった。

また、K地区の南部からは、こぶし大から人頭大の石を敷き詰めた石敷き道路(幅約2m)が発見された(図4)。これは、冬季に雨が降っても町の内部を容易に移動できるように意図されたものと考えられる。また、道路の脇には、「側溝(そっこう)」が設けられ、雨水が道に溜まらず排水できるようになっていた。この側溝は、他の水路が石組みで作られたのと対照的に、すべて焼成レンガで作られていた。おそらく、下の町の主要な道路は、このような側溝をもち、冬季の雨でもぬかるむことなく町の中を移動できたと考えられる。

この地区で最後に報告しておきたいのは、その北西部から非常に珍しい犬(イエイヌ)の埋葬が発見されたことである(図5)。中型犬の規模をもち、全身骨格が保存状態よく丁寧に埋葬されていた。副葬品は典型的なアッシリア系鉢型土器以外は特になかった。この墓のすぐ近郊でもう一つ犬の埋葬と思われる墓が見ついている。こちらの骨の保存状態はそれほどよくなかった。鉄器時代の犬の埋葬は、北メソポタミアでは



図4 K地区で発見された石敷きの道路と焼成レンガ製の側溝(北から)。



図5 K地区北西部で出土した犬(イエイヌ)の埋葬(南から)。

事例が少なく、今後研究を進めていきたいと思う。

3. J地区

この地区は、昨年度調査したG地区の西に位置しており、G地区で出土した石敷きの中庭をもつ大型建造物の全貌を明らかにすることを一つの目的としていた。また下の町がアクロポリスに向かってどれほど広がっているのかを探る目的もあった。調査区の広さは約20×20mであった(図6)。ここでは、大型の建造物群、街路、水路、タンノール(パン焼き窯)、および居住区を区切る壁などが見つかった。

ここで注目すべきは、上記の石敷きの中庭をもつ大型建造物である。この中庭の南側にはA地区で出土したReception Suiteと同じ建築様式の部屋があり、中には焼成レンガの構造物(おそらく暖房のための施



図6 J地区全景(UAVによる撮影)。

設)が構築されていた。このレンガ構造物は、少なくとも3度にわたり場所を変えながら改築されていた。このことはこの部屋が比較的長期間使用されていたことを示している。この部屋の背後には、石敷きの街路が通っており、下の町の主要道路であったと推定できる。この街路にも石組みで作られた側溝が付属していた。

また中庭の西側では、Reception Suite よりさらに大型の部屋が出土した。この部屋は、複数の出入口をもち、壁も他の建造物の倍近くの厚さ(約1m)をもっていた。また部屋の中央部には、石で縁取られた四角形のプラットフォームが構築されていた。さらに特筆すべきは、この部屋の覆土から口縁部に楔形文字の碑文が刻まれている土器片が出土したことである。YAPのエピグラフィスト(山田重郎・筑波大学教授)の解読によれば、碑文にはÉ・GALという単語があり、宮殿もしくは大型建造物を指すという。今後の研究により、出土した建造物の特定ができる可能性がある。

上記の部屋のさらに西側では、構造物は検出されなかった。つまり、これが下の町の内側の縁辺部と考えられる。現在は、アクロポリスと下の町の間にイスラム時代に使用されたと思われる「堀／壕(ほり)」が見えるが、これが鉄器時代にも存在したかどうかを知るためにサブトレンチを調査区の西端に入れたが、確認できなかった。将来の課題である。

上記の石敷きの中庭には東側に大きなピットがあることが昨年度から判明していた。このピットは、中庭を含む建造物が放棄されてから掘られたと考えられる。ここから頭骨の一部が見えていたが、昨年度は掘り上

げる時間がなく、今年度に持ち越していた。発掘したところ、成人男性1個体のみ屈葬された状態で出土した。副葬品はほとんどなかったが、動物骨や土器の断片に混じり、手のひら大の鉄スラグが発見された。

石敷きの中庭の北側には、石敷きの街路、小石と土器片で舗装された小道、およびタンノールが出土した。この部分に壁はなく、中庭からオープンな空間であったと考えられる。調査区の北西隅では、石敷きの街路の一部と焼成レンガで作られた側溝が出土した。K地区で発見されたものと同じような形態であった。

4. H地区

この地区は、昨年度調査したステップトレンチをさらにアクロポリスの上部に延長して発掘を実施した。今シーズンは、5(幅)×15(長さ)mの規模を掘り、結果として3段のステップを作成した(図7)。昨年度のトレンチの最上層は、青銅器時代であったが、今回は、その上の高さ約10mほどの層位を明らかにした。調査の結果、その大半(約7~8m)は青銅器時代の堆積であることが判明した。すなわち、ヤシン・テベのアクロポリスには、厚い青銅器時代の堆積があり、おそらくアクロポリスの規模は、この青銅器時代の集落規模を示していると考えられる。また、上から2段目のステップでは、巨大な泥レンガ製の壁が確認された(図8)。この壁はおそらく「城壁」の一部と思われる。壁の厚さは、判明した部分で約2m。壁は、トレンチの奥にまだ続いているため、さらに厚くなると思われる。また壁の一部は、上から3段目のステップでも確認されており、少なくとも3~4mの高さが残存していると考えられる。壁は、赤褐色と黄土色の2種類の色をもつ泥レンガで構築されていた。また壁の表面は、緑黄色のレンガで覆われていた。これが城壁の外壁を形成していたと思われる。

出土した土器から類推すると、城壁は中期青銅器時代から後期青銅器時代、つまり前2千年紀半ばから後半に年代づけられると推測される。今後の調査により、壁の年代や構築方法、さらに規模などを明らかにしてゆきたい。

最後にステップトレンチの最上段のステップから、アクロポリスの等高線と並行に走る幅70cmの石積み壁が出土した。この壁は石積みが一段しか存在せず、また規模も小さいことから城壁ではないと思われる。出土土器から、この遺構の年代は、鉄器時代と推測される。この地点からアクロポリスの最上部までは、約



図7 H地区：今年度のステップトレンチ発掘部分全景(南より)。



図8 ステップトレンチで検出された泥レンガ製の城壁(南より)。

3mの比高差がある。つまり、アクロポリスのこの部分に堆積した鉄器時代以降の文化層は、アクロポリス北部で確認されたものより薄い可能性がある。アクロポリス北部は、過去に主だった発掘調査が行われており、厚いイスラーム時代の文化層があることが確認されている。

5. その他の調査

上記のように3カ所の発掘調査以外では、以下のような調査を実施した。ここに簡単に記す。まず、2022年および2023年シーズンの出土人骨の分析を行った(担当: Maria D. Sletterrød コペンハーゲン大学)。2023年のものは9個体、うち成人4個体(男性:3、女性:1)、子供2個体、不明3個体であった。2022年のものは1個体で、青年期女性のものであった。

次にヤシン・テペとその周辺で磁気探査を実施した。



図9 「下の町」北東部の試掘調査で出土した焼成レンガ遺構(西より)。

この探査は、後述する文化庁委託業務の人材育成の一環として実施された。2018年に探査を実施したドイツの Eastern Atlas 社が再び担当した。調査は、1) 2018年に土地の状態により探査が実施できなかった下の町の北東部、2) ヤシン・テペの約150m南南東に位置する村落規模遺跡(SSP4遺跡)とその周辺、および3) 比較のためにラニア平原の遺跡1件、の合計3カ所で実施された。調査成果の精査はこれからであるが、ヤシン・テペ遺跡の集落構造に関連する興味深いデータが取得できている。

また次年度以降の調査を見越して、下の町の北東部およびヤシン・テペの約1km南東に位置する Girdi Marif Tepe (SSP3) で試掘調査を行った。下の町の試掘は2カ所で行われ、そのうちの一つからは焼成レンガの構築物が出土した(図9)。

最後に、文化庁から受託した令和5年度文化遺産国際協力拠点交流事業により、博物館の活性化のための研修、考古学遺跡保護のための研修、および日本への招聘研修によりクルディスタン古物文化遺産局職員の人材育成を行った。スレイマニヤ博物館においては、展示手法の研修の一環も兼ねて、ヤシン・テペ遺跡の調査成果の展示を行った。スレイマニヤ博物館は、近年各国の支援が入り、急速に展示内容が改善されつつある。

また、例年どおり、出土した炭化物、人骨、動物遺体(貝類、脊椎動物)、土器片、植物遺体、スラグ類などの分析サンプル用資料を現地当局の許可のもと日本に持ち帰ることができた。今後、これらを順次分析してゆく予定である。

6. まとめと展望

今シーズンは、昨シーズンの課題であった不明点を明らかにするとともに、下の町の構造、アクロポリスの層位、および都市全体の構造について大きな成果を得ることができた。また地下探査や試掘を含む周辺遺跡の調査も進み、ヤシン・テペが都市としてどのように機能したのかを考えるデータを取得することができた。今後は、下の町の新たな場所で調査を展開することで、都市構造ならびに、周辺集落との関係も明らかにしてゆきたい。そうすることで、アッシリア帝国時代の拠点都市における景観復元という目標に近づいてゆけると考える。

2023年度は、コロナ禍後でようやく落ち着きを取り戻した中で、円滑にフィールド調査を実施することができた。毎度のことではあるが、調査の実施にあたり現地当局や日本の所属機関のサポートがあったことはいまでもない。中東は治安状況の不安定さだけでなく各国とも厳しい経済状況に置かれている。またコロナ禍後には渡航費用や現地の物価が高騰しており調査団の財政にとっても厳しい状態が続いている。そのような中でも地道に調査研究を続けることで、今後とも成果を上げてゆきたいと思う。

本プロジェクトは日本学術振興会・科学研究費補助金・基盤研究(B)「境界域に着目した古代西アジア帝国の支配形態と構造解明を目指す歴史考古学的研究」(代表：西山伸一)(課題番号 20H01328)、萌芽研究「考古学・地理情報科学の融合からみる文化財の新たな記録システム構築に向けた研究」(代表：西山伸一)(課題番号 21K18384)の支援を受けて実施されました。

また共著者以外では、渡部展也(中部大学)、黒澤正紀(筑波大学)、池端慶(筑波大学)、Jeanine Abdul Massih(レバノン大学)、Mouhamad Abdel Sater(レバノン大学)、Nehme Abou Rjeily(レバノン大学)、Claude Jabre(レバノン大学)、Ralda Salamoun(レバノン大学)、Youssef Shoumar(レバノン考古総局)、Maria D. Sletterrød(コペンハーゲン大学)、Carl Longo(ジャーナリスト)および中部大学教職員のご協力に深く感謝申し上げます。

また、いつも変わらず全面的サポートをいただいている Keifi Ali Mustafa クルディスタン古物文化遺産総局総裁、Hussein Hama Gharib Hussein スレイマニヤ古物文化遺産局局長、Nawshirwan Aziz Muhammad スレイマニヤ古物文化遺産局発掘調査課課長、

ならびにスレイマニヤ古物文化遺産局やスレイマニヤ博物館の職員の方々に厚く御礼申し上げます。

参考文献

- ・ Nishiyama, S. 2020 Provincial control in the eastern reaches of the Assyrian Empire: A view from Yasin Tepe, Iraqi Kurdistan. In: S. Hasegawa and K. Radner (eds.), *The Reach of the Assyrian and Babylonian Empires: Case studies in Eastern and Western Peripheries*, 45-72. Wiesbaden: Harrassowitz.
- ・ Nishiyama, S. and S. Yamada 2023 Nabu at the Frontiers of the Assyrian Empire: An Inscribed Bronze Necklet from Yasin Tepe, Iraqi Kurdistan, *Zeitschrift für Assyriologie und Vorderasiatische Archäologie*, 113/2, 250-265.
- ・ Yamada, S. 2020 The conquest and reorganization of the land of Zamua/Mazamua in the Assyrian Empire. In: S. Hasegawa and K. Radner (eds.), *The Reach of the Assyrian and Babylonian Empires: Case studies in Eastern and Western Peripheries*, 167-193. Wiesbaden: Harrassowitz.
- ・ Yamada, S. 2023 Yasin Tepe: on the margins of empire, *Thin End of the Wedge*, Podcasts (Nov. 17, 2023, Episode 61), <https://www.wedgepod.org/>
- ・ Yasin Tepe Archaeological Project (Japan). 2023 *Yasin Tepe Archaeological Project (YAP): Field Report of the 2023 Season, Slemani, Iraqi Kurdistan* (Submitted to the Slemani Directorate of Antiquities and Heritage, September 2023).
- ・ 西山伸一・常木晃・ハーシム・ハマー・アブドゥッラー・沼本宏俊・山田重郎・渡部展也 2017「アッシリア帝国東部辺境を掘る—イラク・クルディスタン、ヤシン・テペ考古学プロジェクト・第1次(2016年)—」『第24回西アジア発掘調査報告会報告集』16-20頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 西山伸一・ハーシム・ハマー・アブドゥッラー・常木晃・山田重郎・沼本宏俊 2018「アッシリア帝国東部辺境を掘る—イラク・クルディスタン、ヤシン・テペ考古学プロジェクト・第2次(2017年)—」『第25回西アジア発掘調査報告会報告集』17-21頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 西山伸一・ハーシム・ハマー・アブドゥッラー・山田重郎・沼本宏俊・常木晃 2019「アッシリア帝国東部辺境を掘る—イラク・クルディスタン、ヤシン・テペ考古学プロジェクト・第3次(2018年)—」『第26回西アジア発掘調査報告会報告集』109-113頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 西山伸一・ハーシム・ハマー・アブドゥッラー・山田重郎・沼本宏俊 2020「アッシリア帝国東部辺境を掘る—イラク・クルディスタン、ヤシン・テペ考古学プロジェクト・第4次(2019年)—」『第27回西アジア発掘調査報告会報告集』21-25頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 西山伸一・ハーシム・ハマー・アブドゥッラー・山田重郎・沼本宏俊 2021「アッシリア帝国東部辺境を掘る—イラク・クルディスタン、ヤシン・テペ考古学プロジェクト・2020年の進展—」『第28回西アジア発掘調査報告会報告集』20-25頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 西山伸一・ハーシム・ハマー・アブドゥッラー・山田重郎・沼本宏俊 2022「アッシリア帝国東部辺境を掘る—イラク・クルディスタン、ヤシン・テペ考古学プロジェクト・2021年度の成果—」『第29回西アジア発掘調査報告会報告集』43-48頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 西山伸一・山田重郎・沼本宏俊・サーミー・ジャミール、ラワ・サーレフ、ハーシム・ハマー・アブドゥッラー 2023「アッシリア帝国東部辺境を掘る—イラク・クルディスタン、ヤシン・テペ考古学プロジェクト・第6次調査(2022年)—」『第30回西アジア発掘調査報告会報告集』113-118頁 日本西アジア考古学会。